

シンポジウム

B

「文化的・社会的環境で育つ子ども —アフリカ子ども学の試み—

座長：安藤寿康（慶應義塾大学文学部教授）

話題提供者

亀井伸孝（愛知県立大学准教授）

清水貴夫（総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員）

山田肖子（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）

竹ノ下祐二（中部学院大学子ども学部准教授）

コメンテーター：スィアウ オンウォナ-アジマン Siaw Onwana-Agyeman
（東京農工大学大学院農学研究院 准教授）



アフリカ子ども学研究会との共同企画シンポジウムを催して

シンポジウムBは、日本子ども学会と「アフリカ子ども学研究会」との共同企画という形で開催し、4名の話題提供者と1名のコメンテーターの先生方に登壇いただいた。

人間が「生物」として生まれ「文化」の中で育つものだとすれば、「生物」と「文化」の接面に起こる「生々しくも生き生きとした」現象を、いま最もはっきりと目の前に示してくれるのが、このシンポジウムが焦点をあてた「アフリカの子ども」たちなのではないだろうか。そして日本子ども学会が扱うべきテーマとして、「アフリカ子ども学」は、単にアフリカという限定された地域問題ではなく、ヒト＝人間の進化的由来と文化的由来を解明する、およそ人間を扱う科学が取り組まねばならない普遍の問題に、そのどの研究課題もが通じてかかっていることを、このシンポジウムを聞いた方々は、強い印象とともに理解したはずだ。

「アフリカ子ども学」の中心的牽引者である亀井氏

が明確に述べているように、われわれはアフリカの子どもから実に多くを学ぶことができる。

近代西欧化された文化が自明のものとなったわれわれに対して、ストリート・チルドレンと称される子どもたちの振る舞い（清水氏）、近代学校との出会い方（山田氏）、そして彼らの絵の描き方（竹ノ下氏）の中にも、そもそも「子どもとは何なのか」「人間はどこからきてどこに向かっているのか」といった科学的に根源的な問いを考えるための重大なヒントが読み解けたと思う。そもそも「子どもとは何なのか」「人間はどこからきてどこに向かっているのか」といった科学的に根源的な問いを考えるための重大なヒントが読み解けたと思う。その意味でアフリカの子どもは、福祉や支援の対象者ではなく、科学研究の方法論提供者であるといえよう。

（安藤寿康）

開催報告と御礼

亀井伸孝(愛知県立大学／アフリカ子ども学研究会)

第11回子ども学会議「文化的・社会的存在としての子ども」2日目の企画として、シンポジウム「文化的・社会的環境で育つ子ども—アフリカ子ども学の試み」が開催された。

2010年頃から、学際的なメンバーのゆるやかな集まりとして勉強会を重ねてきた「アフリカ子ども学研究会」は、このシンポジウムを日本子ども学会との共同企画として開催し、亀井、清水、山田、竹ノ下の4名による発題をまじえながら、会員、参加者のみなさまと討論する機会をいただいた(各発表内容は、次ページ以降を参照)。

このシンポジウムの意義は、以下の各点にまとめられる。

第一に、アフリカを「劣って後れた存在」と位置づけるのではなく、人間の文化的・社会的多様性の一角をしめる同時代の他者として、対等に学び合うことの重要性をメッセージとして発信できたことである。つまり、「アフリカの人たちが日本から学ぶこと」もあれば、逆に「日本の私たちがアフリカに学ぶこと」もあるというふうに、双方向の学び合いができる可能性を示した。

第二に、わずか4件の発表であったとはいえ、異なるアフリカの国・地域、文化、宗教、社会階層の話題に触れた。「アフリカ」と一言で総称することが難しい、多様性の一端を紹介することができた。

第三に、アフリカに関わる私たちが、主として日本の子どもたちと向き合う研究者、実践者の各位から示唆を受けたことがある。アフリカを日本の文脈においてどのように紹介していくか、学校教育が普及するも急速な少子化を迎えている日本の社会において、それとは真逆の特徴をもった諸社会をあわせもつアフリカの話題を、どのように提供して、議論をつないでいく

ことができるか。シンポジウムでうまく表現できたこと、できなかったことも含め、両面において学ぶことが多かった。

ガーナ出身で、当日はコメンテータとして参加したスィアウ・オンウォナ・アジマン准教授(東京農工大学)は、「山の子どもは背が高くなる、谷の子どもは背が低くなる」ということわざを引きつつ、英語やフランス語などの公用語にアクセスできる子どもとそうでない子どもの間に教育格差が生じている問題を指摘した。また、自然環境や家庭の生業、宗教などによって子どもたちの置かれている環境はさまざまであり、一律に論じて何らかの解決策を提示することの困難さについて述べた。

この他、今回は扱えなかったこととして、例えば、乳幼児の高い死亡率と衛生、児童労働の是非をめぐる議論、ジェンダーや障害に関連する子どもたちの多様性、急速な都市化を背景とした子どもの環境変化、教育政策とノンフォーマル教育の関わり、子どもに対する外部援助者のまなざしと関与などがある。それぞれ重要なテーマであり、アフリカ諸社会の固有の文脈に深く関わっているが、日本社会との比較を通じて、これからの私たちの子ども研究と子ども観に示唆をもたらすトピックとなる可能性がある。

アフリカの事例を参照しつつ、日本と世界の子どもたちについて検討し続けることの意義深さを、今後とも日本子ども学会会員各位と共有できればと願っている。

企画立案から当日の開催までお世話になった宮下孝広第11回子ども学会議実行委員長(白百合女子大学)、シンポジウム提案者であり座長も務めてくださった安藤寿康理事(慶應義塾大学)ならびに学会、会議スタッフ各位、ご参加のみなさまに、この場をお借りしてお礼を申し上げます。



シンポジウム B

アフリカ子ども学のねらい： 私たちがアフリカから学べること

亀井伸孝（愛知県立大学准教授）

アフリカは、世界第2の面積をもつ大陸と、その周辺の島じまから成り立っている。10億の人口を擁し、これらの人びとが55の国・地域、2,000種を超えるさまざまな言語集団に分かれて暮らしている。そして特筆すべきは「子どもが多い大陸である」ことである。数え方にもよるが、人口の半数が子どもだとの指摘もあり、アフリカの子どもをテーマにするということは、「5億人の同時代の仲間と出会う」ことでもある。

一方、私たちが「アフリカの子ども」と聞いた場合、何を想像するであろうか。飢餓、貧困、戦争、疾病、不就学、児童労働など、「非力な存在」の側面が強調されがちである。事件性の高い不幸なできごとに注目して、アフリカの子どもの全体像を作ってしまうというバイアスがある。

2010年、熱帯雨林の狩猟採集社会の子どもたちを主役とした民族誌『森の小さな〈ハンター〉たち』が刊行された。このテーマに関心を寄せたNPOアフリカ日本協議会が、著者を囲む公開書評会を開催してくれた。この中で、アフリカの子どものイメージが現実とずれていること、子どもの実態をさらに学ぶべきことが参加者によって共有され、2010年に「アフリカ子ども学を語る会」を開催した。以後、年に1回のペースで、「学校」「徒弟制」「周縁化された子どもたち」などのテーマを掲げながら公開行事を重ねてきた。また、日本アフリカ学会、国際

人類学民族科学連合（IUAES）での発表、セネガルやブルキナファソでの公開ワークショップ、『アフリカ研究』への論文掲載など、その発信の場と方法を拡大してきた。

事例を持ち寄って議論を重ねるにつれて、いくつかの視点が加わった。ひとつは、生業・生活の多様性である。狩猟採集社会の子どもの事例紹介から始まったこの集まりであるが、乾燥帯から湿潤帯までの複雑で多岐にわたる自然環境のもとで生活する牧畜民、農耕民、そして急増する都市生活者における子どもたちの事例も集まってきて、アフリカの子どもたちの生活を個別に学ぶ必要性が共有された。また、伝統宗教に加えてイスラーム教とキリスト教の伝播を経た宗教的多様性、植民地期の英語やフランス語の導入をふまえた言語的、民族的多様性とそれらの共存、これらの特性を踏まえて、子どもの学びと育ちを考えていくことも重要である。さらには、アフリカを成長市場と捉える視点から、子どもに関連する産業面に関心をもつ人々も現れている。

アフリカ子ども学が重視することは、アフリカの子どもたち「から」学ぶ姿勢である。このことは、アフリカへの理解を深めることに寄与するにとどまらず、ひるがえって、「多くのことを得るとともに、多くのことを失ってきた」私たち日本における子どもの学びと育ちを再検討する上で、重要な参照事例を提供することともなるであろう。



〈プロフィール〉

京都大学大学院理学研究科修了、博士（理学）。関西学院大学、東京外国語大学、大阪国際大学を経て、現在、愛知県立大学外国語学部国際関係学科准教授。文化人類学・アフリカ地域研究。単著に『森の小さな〈ハンター〉たち』（京都大学学術出版会、2010）、『アフリカのろう者と手話の歴史』（明石書店、2006）、『手話の世界を訪ねよう』（岩波ジュニア新書、2009）、編著に『遊びの人類学ことはじめ』（昭和堂、2009）、共著に『公共人類学』（東京大学出版会、2014）ほか。日本文化人類学会理事。写真はカメルーンの森の子どもたちと。2012年撮影。

ストリート・チルドレンから 「アフリカ子ども学」を考えると

清水貴夫 (総合地球環境学研究所)

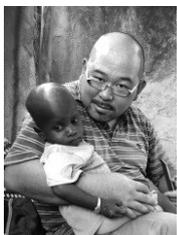
「アフリカ子ども学」研究会では、①アフリカの子どもに付与された(主にネガティブな)イメージからいかに解放させるか、②多様な環境に置かれるアフリカの子どもを学ぶことにより、日本で語られる「子ども」のあり方を照射する、という二つの大きな問題意識を共有している。本発表で提示したのは、西アフリカの内陸イスラーム文化圏に位置するブルキナファソの都市部のストリート・チルドレンの事例である。この事例を通して特に①の問題意識から、ストリート・チルドレンに付与されたイメージと彼らの生活の間の乖離を明らかにして、ラベリングすることの危険性を指摘した。

一般的に、ストリート・チルドレンとは、都市部を徘徊する、大人の保護や教育を受けていない子どもたちのことを指す。彼らには、重層的な弱者性、すなわち、子どもという弱者性、おとなの庇護から逸脱した状態にあるという弱者性、さらに、貧困や野性などアフリカの未開性に通ずる弱者性など、いわばアフリカ子ども学が解放を目指すネガティブ・イメージが付与される。そもそも生まれつきのストリート・チルドレンなど存在しないのは自明だが、こう呼ばれる子どもたちに共通するのは成育環境と、外部者によるラベリングによって、ストリート・チルドレンという存在ができあがったのである。

いかなる構造をもって社会問題のレッテルを貼られたか。子どもたちがどのような成育環境に置かれ、ストリートでどのような生活を営むのか。これまでにそれほ

ど多く語られることはなかった子どもの生活の細部を明らかにすることこそが、ネガティブ・イメージから解放されるための重要なプロセスである。その一例として、NGOとストリート・チルドレンの連関性について紹介する。NGOは「少年を安定化 Stabilization すること」を目的に活動を展開する。中でも最も中心的なのは、少年たちが元々所属していた社会、家庭に戻す活動(標準化 Normalization)である。しかし、少年たちの移動性に目を向ければ、ストリート・チルドレンの3分の1ほどが都市を離れており、インタビュー調査では、多くの少年たちが農閑期に家族の仕事を手伝いに行くと答えた。少年たちが元々の生活のサイクルの中にストリート生活を位置づけ、支援活動を読み替えて彼らの生活資源として活用していることが読み取れるのと同時に、その裏側にある支援機関の政治性も見える。

この地域に貧困問題があることは否定しない。しかし、こうした生活上のいくつかの実践が機能しているとする、ストリート・チルドレンの存在を不安定な家族関係や貧困問題ばかりに起因させることは、ストリート・チルドレンの一側面しか表していないことがわかるのである。こうして重層的な弱者としてスティグマ化された子どもたちを、いかにして解放するのかを支援機関とともに共有し発信していくことも「アフリカ子ども学」の重要な課題ではないだろうか。



〈プロフィール〉

大学卒業後、民間企業、NGO 職員、名古屋大学大学院文学研究科を経て現職。専攻は文化人類学。西アフリカ内陸部を主なフィールドとし、都市の若年者層がインフォーマルに紡ぎだす文化・社会的現象を文化人類学的視点から研究を進めている。近著に「ニジェール共和国における伝統教育と社会 ザルマ社会のイスラーム教育」、大場編『多様なアフリカの教育 - ミクロの視点を中心に -』、未来共生リーディングス Vol.5、大阪大学未来戦略機構第五部門、pp.69-79。

シンポジウム ⑥

学びの場としてのインフォーマルセクター： ガーナ国クマシにおける自動車修理徒弟のライフコース

山田 肖子 (名古屋大学大学院国際開発研究科准教授)

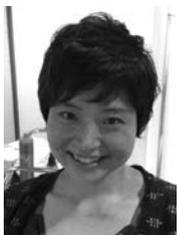
私は、教育学者の立場で、アフリカで、学校教育に関する政策や学校現場、学校と社会の関係について調査を行ってきた。しかし、この20年ほどの間に爆発的に学校が増えたとはいえ、学校における教育は、アフリカ社会では異質な外来のものであるという感覚はぬぐえない。「学校=教育」ではないし、アフリカ社会には、伝統的に固有の教育方法や教育観がある。そこで、「教育」を学校の中の問題としてとらえるのではなく、社会の側から学校や教育の意味を再検討したいと考えている。

今回の発表では、ガーナ国のクマシという町にある古い産業集積地において、徒弟を行っている若者とのインタビュー調査を基に、徒弟という伝統的かつインフォーマルな教育の場が、どのような経緯と背景を持った若者によって選択され、また、そこではどのように技能が学ばれているかについて述べた。

顧客のニーズに臨機応変に対応しつつサービスを提供する技術労働者の技能形成は、学校の技術職業科などで教えられるモジュール化した知識を越えた部分が少なくない。学校教育が普及し、中学程度まで修了する者は増えたが、いまだに中卒後の大部分の若者は徒弟などのインフォーマルな場で学びを継続していると考えられている。この調査を行っているクマシ県は、歴史的な産業

集積地があるという背景もあってか、技術訓練の質が高いというイメージが広く定着しており、その名声に惹かれ、徒弟も、ブルキナファソやナイジェリアといった近隣国から来ている者もいる。また、周辺の技術高等専門学校、ポリテクニク、大学なども機械、電機等のコースが充実している。学校教育とインフォーマルな場でのまなびは相互排他的なもののように考えられることが多いが、本調査からは、学習者が、自らの人生設計や社会経済的状况に応じて、教育提供側の意図とは関わりなく、様々な学びの機会を選びとり、再構成していることが見て取れる。すなわち、専門家が開発したカリキュラムを教える学校教育を受動的に受けるのではなく、学習者自身が、自らの将来設計や置かれた状況に応じて学ぶ場や内容を選んでいるという、教育に関する意思決定主体の明確な違いを示している。

こうしたアフリカ社会での調査は、単にアフリカの状況を理解することにとどまらず、日本にいると当然のものとして見過ごしてしまいがちな教育学や学校教育の枠組みを問い直す機会を提供する可能性がある。今後、学習者の動機や技能形成の方法、社会における知識の意味などを、より深く研究していきたいと考えている。



〈プロフィール〉

インディアナ大学博士課程修了(教育政策研究、アフリカ研究)。私がアフリカに関わるきっかけは、開発援助コンサルタントとしてだった。援助プロジェクトの枠を超えて、もっとアフリカ社会の理解に基づいて教育を考えようと、研究の道に進んだ。最近、教育政策や学校についてだけでなく、伝統的徒弟制度などを通じたまなびについても研究している。これからも、歴史、文化、政治、経済との関わりの中、アフリカ社会でのまなびの意味を考えていきたい。主要著書:『国際協力と学校—アフリカにおけるまなびの現場』(創成社)、『産業スキルディベロップメント—グローバル化と途上国の人材育成』(日本評論社、共編者)など。

ガボンの村の小学校で 動物絵画コンクールをやってみた

竹ノ下祐二 (中部学院大学子ども学部准教授)

本発表では、アフリカ、ガボン共和国にあるムカラバ・ドッドゥ国立公園（以下ムカラバ）に隣接する村の小学校で行なった野生動物の絵画コンクールについて報告し、そこから、1)アフリカの子どもにとっての学校教育のありよう、2)アフリカの視点から眺めたときに見えてくる日本の図画工作教育、生活科教育の意義、3)アフリカで子どもを対象とした環境教育を行なう際の課題、の3点を考察する。

ムカラバはアフリカ熱帯林で有数の高い生物多様性を持ち、とりわけゴリラの密度が高いことで知られている。演者らの研究グループは、1999年以降、ゴリラを中心にムカラバの野生生物の生態研究と保護を行ってきた。ムカラバの生物多様性を将来にわたって保全するには、地域住民、なかでも次代を担う子どもたちが、自分の暮らす地域の自然をよく知り、その重要性を理解することが不可欠である。そこで、2011年2月に、村の小学校の生徒58人を対象として、野生動物の絵画コンクールを実施した。

実施にあたっては、GRASP-Japan（大型類人猿保全計画日本委員会）の集めた募金から、スケッチブック、絵の具等の画材を子ども達に提供した。絵画指導は小学校の校長が中心となり学校で行なった。とくに動物種は指定せず、自由に絵を描いてもらった。完成した絵は、日本人やガボン人の研究者、地域の有力者等に審査を依頼して優秀作品を選び、受賞作品を描いた子どもを表

彰し、記念品を贈呈した。表彰式は村の住民を招いて小学校で行なった。また、コンクール終了後、すべての絵を県庁所在地にある国立公園局の施設に設置したブースに展示し、一般市民にも公開し、好評を博した。

行事として成功した一方で、いくつか課題も浮かび上がった。まず、子どもたちの絵の多くは、画用紙をいっぱい使う、全体に着色するといった図画の基本ができていなかった。未完成のものも多かった。図鑑や写真集から丸写ししたと思われるものもあった。コンクールにかかる時間が足りなかったことを差し引いても、日本の子どもではあたりまえの、身の回りの出来事やものを素直に眺め、それを自由にのびのびと画用紙に絵で表現する、という訓練ができていないことがうかがわれた。また、「学校で絵を描く」ということが、子どもたちにとっては「やらされるお勉強」であって、「表現活動」にはなっていないように思われた。

正直なところ、絵画コンクールが子どもたちへの環境啓発活動になったかどうかには疑問符をつけざるを得ない。すなわち、「絵画コンクールによる環境教育」は、日本の学校教育を前提とした発想であり、地域の実情に即した手法ではなかったということを実感させられた。同時に、日本の幼児教育～初等教育における表現活動や図画工作、音楽、生活科などの、主要四教科（国語・算数・理科・社会）以外の教科が、子どもの学ぶ力の基礎を養ううえで重要な機能を果たしていると感じた。



〈プロフィール〉

中部学院大学子ども学部子ども学科准教授。専門は人類学・霊長類学、子ども学。京都大学大学院理学研究科修士、博士（理学）。1994年より、中央アフリカ、コンゴ、ガボン等、中部アフリカで野生大型類人猿の野外研究と保全活動に従事。最近では動物園の飼育ゴリラの行動研究も行なっている。現在のテーマはヒトにおける「協同育児」の起源と進化。著書に『「セックスの人類学」』（春風社：2009年、共編）、『フィールドに入る（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ1）』（古今書院：2014年、共著）など。写真はガボンの村に住む同名の少年「タケちゃん」と。